

【発表題目】

生涯学習・成人教育に関する先行理論の検討
赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』の分析を通して

【発表構成】

1. はじめに
2. 本書の構成と特徴
3. M・ノールズの「成人教育プログラム計画理論」
 - 3-1. M・ノールズとは
 - 3-2. 「成人教育プログラムの計画理論」について
4. エンゲストロームの「活動理論・活動システム・拡張的学習サイクル」
 - 3-1. エンゲストロームとは
 - 3-2. 「活動理論・活動システム・拡張的サイクル」について
5. 考察—教師教育者教育にどのように用いるのか—
6. おわりに

1. はじめに

本発表では、『生涯学習理論を学ぶ人のために』（以下、本書を略記）から、まず「成人学習プログラム計画理論」と「拡張的学習サイクル」という 2 つの理論を取り上げる。この 2 つの理論は、前回の発表で示された「引き上げモデル」と「ファシリテーターモデル」に求められる教師教育者の資質に基づき選択した。これらがどのような理論なのかを示し、教師教育者教育に用いることができる理論の可能性を探る。

以上を目的とし、RQ を以下のように設定する。

【RQ】 生涯学習・成人教育の理論をどのように教師教育者教育に用いることができるか。

2. 本書の構成とねらい

(1) 本書の構成

本書は、目次にある通り全 9 章で構成されている。各章ごとに、中心となる理論を 1 つ取り上げている。その上で、項目の順序やタイトルは異なるが、各章には①取り上げた理

論のエッセンス、②欧米での研究動向、③日本での研究動向、④その理論の意義と課題¹の内容が盛り込まれている。つまり、生涯学習理論について代表的な理論の基礎的内容を 9 つ学ぶことができる。

また、本書は、前半の 4 章分が生涯学習を支援する側からの理論、後半の 5 章分が生涯学習を自ら実践する側での理論²というように大きく 2 部に分けてられている。

(2) 本書のねらい

本書が、9 つの理論を網羅的にかつ、基礎的な内容を述べていることから、生涯学習を専門的に学ぶ人にだけでなく、他の分野で活用したいと考えている人、つまり私たちのような人向けにも書かれていると思われる。

あとがきでは、次のように述べられている。

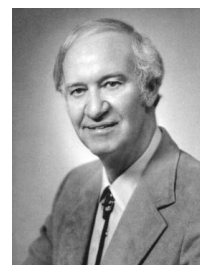
本書をお読みになられた皆さんにお願いしたいことは、本書に盛られた生涯学習の理論を手がかりに、さまざまなフィールドに行かれて、そこで営まれている学習の内容に即してこれらの理論を検証していただきたい。³

このことから、本書の理論を他の分野に応用し、検証してそれぞれの分野の発展にむけて使われることが望まれていると言える。

3. M・ノールズの「成人教育プログラム計画理論」

3-1. M・ノールズとは

アメリカの代表的な成人学習論者であり、成人教育学について学ぶときに必ずといってよいほど名前を聞くのがノールズである⁴。彼は、成人教育学を「成人の学習を援助する技術と科学」と定義⁵し、また、ペタゴジー(教育学)とアンドラゴジー(成人教育学)を区別するなどして成人教育学の発展に多く寄与している人物である。



3-2. 「成人教育プログラムの計画理論」について

ノールズの成人教育学の主な内容は成人教育者、成人学習者、成人教育プログラム計画理論の 3 つに分けられる。中でも、重要な位置を占めているのがプログラム計画理論であ

¹ 赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社、2004年、p.1。

² 上掲、1、p.1。

³ 上掲、1、p.262。

⁴ 上掲、1、p.9。

⁵ 上掲、1、p.9。

る⁶。

ノールズはこのプログラム理論で、学習者のニーズを重視し、それに基づいた教育プログラムを構成することを主張している。具体的には、まず、①個人のニーズ、②組織のニーズ、③地域社会のニーズに分けて、これらを研修をつくる機関の目的、プログラムの実行可能性、対象者の関心に沿っているか、という3つのフィルターを通して厳選される。見事この過程を通過したニーズから、プログラムの運営目的と教育目的(自分自身、組織、地域社会のために学ぶ「べき」もの)⁷の目標を作っていくという過程になっている。

この理論は欧米諸国を中心に普及したが、1980年代からノールズに対する批判が出てくる。主な批判は、ニーズを先に調査すべきかどうかという点である。本書の中では、「まず、計画者の人間観、社会観、世界観が学習者のニーズに先行するのではないか。」⁸、「ニーズに応えるという考え方は、理論的に制限されており、かなりのイデオロギ一的な意味を帯びている。」⁹という批判が取り上げられている。つまり、ニーズを調査し、それを目標にするというやり方は、学習者のニーズ以上の問題意識を生むことができないし、プログラムを行う側の理由が欠落している。学習者に新たな視点を提示するためには、計画者が「このプログラムを行う理由は何か。」¹⁰をまず考え、ニーズ調査の必要性を問うべきである、と批判している。

以上のように、批判されている点は実際に利用する際に検討する必要がある。しかしながら、ノールズのプログラム計画理論は全ての根底になっているため、十分検討する意味はあると言える。

1 成人教育学

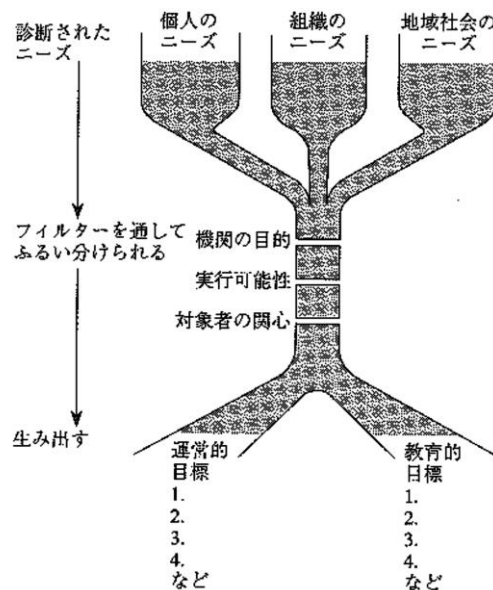


図1 ニーズを目標に変換するプロセス

(本書 p.13 から引用)

⁶ 上掲, 1, p.12。

⁷ 上掲, 1, p.13。

⁸ 上掲, 1, p.21。

⁹ 上掲, 1, p.24。

¹⁰ 上掲, 1, p.21。

4. エンゲストロームの「活動理論・活動システム・拡張的サイクル」

4-1. エンゲストロームとは

ユーリア・エンゲストロームは、ヘルシンキ大学・活動理論と開発作業研究センター（Center for Activity Theory and Developmental Work Research）に所属する成人教育学博士である。文化的・歴史的活動理論や開発作業の研究に関心を寄せており、組織化作業の新しい方法としての協働構成における拡張的学習に注目している。¹¹



4-2. 「活動理論・活動システム・拡張的学習サイクル」について

「拡張的学習サイクル」とは活動理論に基づいた1つのモデルである。よって、まず「活動理論」および、その分析単位である「活動システム」について示す。（別添資料1）

活動理論とは、「人間の協働的・社会的な実践活動のシステムを分析対象にして、その新たなデザインを実践現場で生み出そうというもの」¹²である。この分析単位となっているのが「活動システム」である。つまり、現場（例えば、学校現場や医療現場など）の社会的実践を捉える理論的枠組みとなるのが「活動システム」であり、このシステムで自らの仕事や組織を新たにデザインしていくプロセスを「活動理論」という。

では、「活動システム」について具体的に見ていく。活動システムの基本となるのは、「主体」と「対象」と「コミュニティ」の互いの関係である。「対象」というのは、集団的活動がめざしていく動機であり、働きかける「素材」や「問題」¹³のことである。この基本関係を軸にして全部で6つの構成要因によって成り立っている。図の上部にある「人工物」とは、「主体」が「対象」に働きかける時に用いる道具や手段となるものである¹⁴。これには、物だけでなく、理論やアイデアなど物質をして存在しないものも含まれる広い概念である。また、図の下部にある「ルール」は社会的な規範、統制や慣習¹⁵のことであり、「分業」は、知識や課題によって分けられるものと、権力や地位によって分けられるものを指す。

以上の全てが関連しあっているのが活動理論であり、基本的関係である「主体」「対象」「コミュニティ」は私たちが直接、行為として目にするものであり、その他の部分は行為としては目に見えない基底部分である、というように分けられる。

では、この活動システムが、活動システムを編み直し、新たにデザインしていくことへどのようにつながるのか。これは、活動システム内に現れる「矛盾」がポイントとなって

¹¹ <http://www.edu.helsinki.fi/activity/people/engestro/>（最終閲覧日：2015年7月6日）

¹² 上掲, 1, p.195。

¹³ 上掲, 1, p.198。

¹⁴ 上掲, 1, p.198。

¹⁵ 上掲, 1, p.199。

いる。相互関係を表す矢印には、問題状況が生まれる。それが見出されることで、活動システムの全体的な「矛盾」が明らかになる。この「矛盾」が自らの実践活動を見直し、発達させていくための原動力となっている。つまり、矛盾が増えるほど、あらゆるところに疑問を抱き、個人が協働して新しいビジョンを生み出し、集団を変化させていく¹⁶。この仕組みをモデル化したものが「拡張的学習サイクル」である。(図2)

拡張的学習サイクルとは、「現在の実践活動の文化・歴史的な脈を拡張し、これまでに存在しなかったような協働の実践活動の新しいパターンを構築する学習活動」¹⁷である。具体的には以下の通りである。

「拡張」は、ある個人の「疑問」「逸脱」「違和感」「批判」「探索」などから出発¹⁸する。これをもとに分析し、新しい方法の計画・検証を行う。その検証結果から、また新たな矛盾にぶつかり、さらに改善した方法を実行する。最後はこれまでのプロセスそのものを反省したうえで再構成し、新しい実践を統合・強化していく。

この一連のサイクルを現場の活動システムの中で協働的に行っていくというものである。つまり、「なぜ」という日常における疑問を出発点として、実践へと転換し、反省するという過程を繰り返しながら集団的に拡張し、「学び合い」「育ちあう」ことで、最終的に具体的な新しい実践を生み出していくというものである。

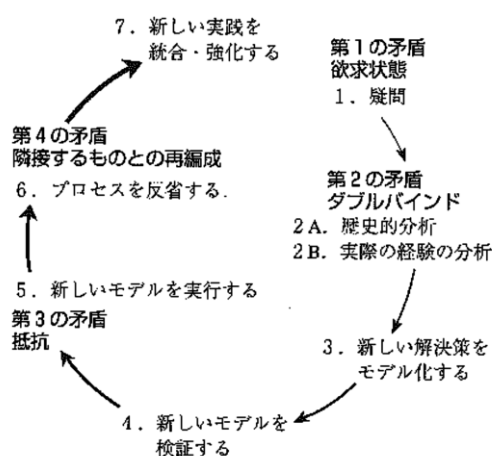


図2 拡張的学習のサイクルにおける矛盾とそれに対する戦略的な学習活動 ([Engeström 2001: 152] より)

(本書 p.207 より引用。)

5. 考察—教師教育者教育にどのように用いるのか—

以上で詳しく示した2つの理論をもとに、(1) 教師教育者に必要な資質・能力として、(2) 教師教育者教育プログラムに用いる可能性、という2点から考察する。

(1) 教師教育者に必要な資質・能力として

「はじめに」で述べたように、今回選択した2つの理論は、前回の発表で示された「引き上げモデル」と「ファシリテーターモデル」に求められる教師教育者の資質に必要な力を示しているものとして選択した。以下に、具体的に示す。

「成人教育プログラム計画理論」は「引き上げモデル」の教師教育者に必要な資質であ

¹⁶ 上掲, 1, p.206。

¹⁷ 上掲, 1, p.204。

¹⁸ 上掲, 1, p.206。

ると考える。このモデルの教師教育者に必要とされるものは、①目標を設定できる力、②目標に基づいてプログラムを計画できる力、の2つであった。この2つの力を身につけるために「成人教育プログラム計画理論」は適していると考え。その理由は、ニーズを調査し、それを段階的にふるいにかけて最終的にプログラムの目標を決めるというものであったからである。この方法を身につけることで、実際のプログラムの計画力までは及ばないかもしれないが、自身で目標を設定する力になるのではないだろうか。

一方、「拡張的学習モデル」は「ファシリテーターモデル」の教師教育者に必要な資質であると考え。このモデルの教師教育者に最も必要とされるのは、ワークショップ等の活動の中で問題意識に気づかせる力であった。「拡張的学習モデル」では、まず日常から生まれる問題意識を出発点としており、その後も何度か矛盾点を見つけていく過程がある。この過程を自ら行うことができる力は、ファシリテーターとして学習者に問題意識に気づかせる能力につながるのではないだろうか。

(2) 教師教育者教育プログラムに用いる可能性

では、以上の理論はどのように教師教育プログラムに反映されるのだろうか。

ここでは「成人教育プログラム計画理論」については用いる方法が、思いつかず「この方法を本や講義で学ぶ」ということ以外に考えられなかったため、今はひとまず置かせていただく。一方、「拡張的学習モデル」はこれ自体を教師教育者教育プログラムに応用できるのではないかと考える。

まず、先程示した活動理論、活動システムに教師教育者の立場で置き換えてみる。(別添資料2)

活動システムの中に入るのは、若手の指導主事と若手の大学教員である。彼らは、自身が行う教師教育プログラムや大学授業について、協働して、どのような研修・養成を行うかを編み出し、新たにデザインする。これらの範囲が活動理論である。

では、活動システムについて詳しく見ていく。「主体」には指導主事と大学教員が入る。そしてこれらが「対象」としているのは教師と教師志望学生であり、それらが属する「コミュニティ」は学校、大学である。これら3つの基本的関係の上部に位置づく「人工物」は、教材、授業、教具、教科観、教科理論など具体物と観念が入る。下部に位置づく「ルール」には学習指導要領や教育基本法、またはそのコミュニティに存在する暗黙のルールが属する。「分業」には、社会科という点から見ると地理・歴史・公民や、校種が入る。このように、教師教育者を集団的活動システムのモデルに照らし合わせることができる。

これを踏まえて、本書 p.200 の活動システムの具体例を見ることにする。(別添資料3)ここでは、「組織に新たな情報通信技術が導入された場合」という具体例が示されている。これを教師教育者に当てはめて、新しい教師教育ハンドブックの導入を例に考えてみる。まず、新しい教師教育ハンドブックが急に導入された時、個々の教師教育者は、攪乱や葛藤、躊躇、ストレス、を感じる。これは、変化のチャンスとしての矛盾となる。これを受けて、

「指導主事」や「大学教員」は「教員」や「教師志望者」へどのような働きかけを行うかを考え、その方法を改善する。そして、結果として教師教育プログラムの有り方が変わるのである。

以上のように、個々に存在する活動システムで問題状況がおこり、これらの解決策を思案するために、教師教育者が集まった場で協働的に拡張的学習モデルに従い、新しいモデル作りや、検証、実行、反省、強化を行う。これによって、教師教育者は学び合い、彼らが抱える課題は、1つのコミュニティだけでなく複数のコミュニティによって共有されることになる。そして、また次の新しい実践が拡張されていくことになる。このような教師教育者の協働の学びの方法によって、プログラム計画を行ったり、ハンドブックを作成または改善できるようになるのではないかと考える。

6. おわりに

今回、2つの理論を示して、教師教育者教育への転用の可能性を示唆した。しかし、実際のところ、活動システムを教師教育者教育に用いることにどのような意味があるのかは明確でないままである。もし、今後この理論を用いることがあるならば、活動理論をすでに学校教育の場に転用させているような事例について検討する必要があると思われる。

【参考文献】

- ・赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社、2004年。
- ・マルカム・ノールズ著、堀薫夫・三輪建二訳『成人教育の現代的実践—ペダゴジーからアンドラゴジーへ—』鳳書房、2002年。
- ・ユーリア・エンゲストローム著、山住勝広ら訳『拡張による学習 活動理論からのアプローチ』新曜社、1999年。
- ・山住勝広著『活動理論と教育実践の創造—拡張的学習へ—』遊文舎、2004年。